行く水

美知代女

五

『お母さま、番町のお姉さまがいらつしつてよ。』

多喜子さんと登志子さんの嬉しげな聲がして、内玄關にお客來らしい樣子です。

今の今まで襖の外に立つたまゝ、悲しい胸を抱いて、とつおいつしてゐた清子はハッとして、急にそちらのお取次ぎにと急ぎました。

『ねお姉さま、私のお家にね清やがゐるの。』

『アラさう。』

『清やつてね、新らしく來たお女中なのよ、指子姫つて面白いお話して貰つたの。』

幼い人達が、可愛らしい言葉つきで、早速報告してゐます。

『好いのね、お姉樣もお話大好きだから、今に御一緒に聞かして貰つて頂戴ね。』

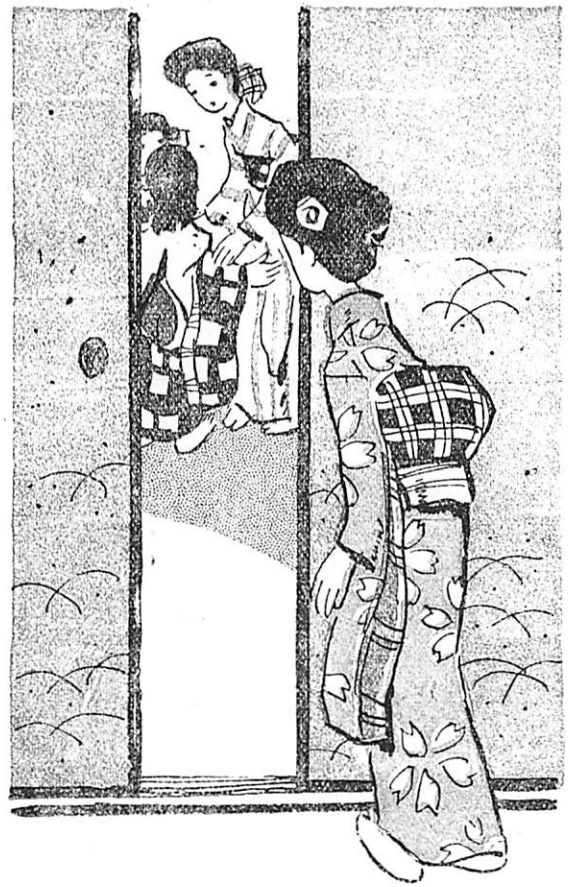
『え、好いことよ。』

さうした話のお客の聲を、清子は何だか聞き覺えがあるやうに思ひながら、ふと見て、危くアッと叫びさうになりました。

『アラ清やが來た、清や、番町のお姉さまがいらつしつたのよ。』

お嬢樣の言葉を振りもぎり、逃げるやうにして、清子は女中部屋さして驅け込みました。ちらッと見

たばかりで、はつきりそれと見定めた譯ではないけれど、あの鈴を張つた黑眼勝ちのお眼元、すちりとしたお姿、どうしたつて愛子さんに相違ない、それに何よりも爭はれないのは、凉やかなその聲、どうしたつて學校の山口愛子さんに違ひない！



『愛子さん、愛子さん！』

清子は繰り返し名前を呼んで、兩手に眼を蔽うたまゝ泣き伏しました。

曾ては誰よりも誰よりも、仲のよかつたその親しい友と杜逢ふて、元來ならば、いきなり手を執り合つて泣きもしたい、かなしい、やる瀨ない胸一杯のむしやくしやを何も彼もすつかり打ち明けて、一緒に泣いても貰ひたい！

ですけれども、餘りと云へば變り果てた今の身の上、清子はさすがに拙い身の運命を、泣きもし、恥ぢもしないでは居られませんでした。

『それにしても、どうして愛子さんは此處へいらしつたのだらう。お嬢樣方がお姉樣々々とお親しげに有仰やる處で見ると、或は御親

類かも知れない、それとも御懇意なお知合かも知れないわ。』

清子は打騒ぐ胸を押鎮め〳〵、こんな事を考へて居りました。

『お前さんてば、又こんな處に引込んでるのね、お前さんも御奉公にあがつた以上、そんなに氣儘ばかりしてないで、些少はハキハキ働いて頂戴な、さうでないと一緒に働く私が困つちまふぢやないの、又お客樣でいそがしいんですからね。』

『濟みません……。』

『忙がしい時に、濟みませんつて、濟ましてられちや困るわよ、さつさとお茶でも持つて行く支度をしておきなさいな。』

『あのお客間ですか。』

『いゝえ』解り切つてるぢやないかと云つた風な、尻上りに云つてのけて、『先刻番町のお嬢樣がいらつしつたのを、お前さんよく知つてるぢやないの、茶の間のお客樣ですよ。』

清子は立ち上つて、亂れた髪をとりあげなどしながら、

『ねえお宮さん、番町のお嬢樣つて、此家の御親類でいらつしやるの。』

『お前さん、奥樣のお姪御さんぢやないかね、お前さん、馬鹿に周章てゝ外したりしてさ、どうしたの？　知つてゐるの？』

『……』

『知つてゐるんでせう、どうせそんな事だらうと思つたわよ、だけどもねお清さん、あの方は始終此家へ出入つてらつしやるから、幾らお前さんが體裁振つて、御奉公してる處を見せたくないと思つたつて此家からお暇を取らない限り駄目ですよ、だから思ひ切つて、實はこれ〳〵で此家へ御厄介になる事になりましたからつて、ざつくばらんに碎けて出たら好いぢやないかね、その方がよつぽど氣が利いてゐるわよ。』

なるほど此家と御親類で、而も奥樣のお姪御と解

つて見れば、幾ら逃げかくれた處で、何時までそれで押し通せるものではない、先刻もお奥でのお話に取次ぎの時はにかんで困ると旦那樣もさう有仰つてらつしつた——思ひ切つて愛子さんにお目にかゝつてしまひませう。

『あゝあ、愛子さんは何とお思ひなさるだらう！』

斯う思ひながら、斷然思ひ切つて、清子はお茶器を持つて、眞赧な顏を俯向け勝ちに、おづ〳〵茶の間へ入つて行きました。

其處には旦那樣、奥樣を始め、幾人ものお嬢樣方に取り卷かれて、懷かしいお友達が此方を向いて坐つてゐます。

『いらつしやいまし。』あるか無きかの聲で、兩手をついて、靜かに頭を下げた清子の横顏はさつと紅らんで、耳の根もとは紅茸のやうにも見えました。

『え、こんちは』氣さくに會釋を返した愛子は、『オヤッ、清子さんぢやなくつて？』

呆れたやうにぢつと相手を見詰めました。

『お恥しう御座いますわ。』

清子は消えも入りたげに俯向いてゐます。

『まあ本當に、あなた如何なすつたの？』

つか〳〵と傍へ寄り添うて、懷かしげに、しげしげと見入ります。その昔に變らぬ美しい友情に燃え輝いた愛子の眼を見ると、清子は嬉しさ、忝けなさに、浮世の憂さも苦しさも、まるで忘れ果てたやうな。すが〳〵しさを覺えるのでした。

『愛子さん、あなたお知己なの？』

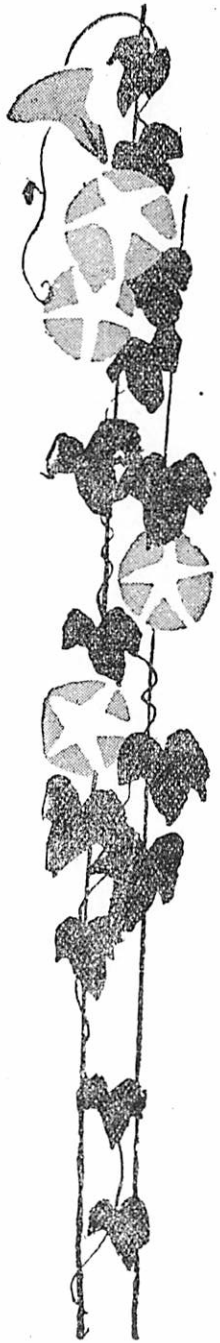
不思議さうに見てゐた奥樣が、先づ第一に斯う訊きました。

『えゝえ、此方石川清子さんてね、私の一番のお仲よしなの、學校で同じクラスだつたんですもの。』愛子さも〳〵親しげに、『ねえ清子さん、二人位仲好しはないのねえ、それだのにあなたはあれつきり、ちつともお手紙も下さらないんだもの、一體如何なすつたのよ、何も彼もすつかり有仰つて頂戴な。』

清子は又はら〳〵と感謝の涙をこぼしました。

『愛子さん、いろ〳〵悲しい譯がありますの。』
『さうでせうとも、お察しするわ。』
『母樣、清やは番町のお姉樣のお友達ね。』
多喜子さんが不思議さうに、嬉しさうに云ひました。
『さうよ、嬉しいでせう。』小さい人達につこり笑つて見せて、すぐ又愛子は、伯父樣伯母樣の方を振向きました。
『清子さんのお父樣は、つい此間まで××會社の社長樣でいらしつたのよ。』
『おう、××會社の？』
今まで默つていらしつた花村辯護士が、驚ろいたやうに訊きました。
『あなた御存じで御座いますの。』
『いや、別段知己と云ふではないがね、一寸知名の實業家で、それに此頃、少々刑事問題が起つてるやうだから。』
『左樣で御座いますか、まあね。』
斯う有仰つた奥樣のお顔には、何が何だか不思議で堪らないと云つたやうな容子が表はれました。
『あの、父は今誤解しられてゐるんで御座います、父は全く、そんな不德義な男ぢやないんですけれど、何ですか詐僞罪だなんて、いさ

はしい罪を被せられて居りますの、本當に、決してそんな事なんぞする人ぢやないんですけれど……。』
清子は父のために、一生懸命辯解しようとするのでした。
『いや大きに、實際石川と云ふ人の過去から云つても、そんな事のありようは無い筈なんですよ、私もこれは何かの間違らしいと思つてたのですが、それで辯護は誰におたのみになつて居るのです？』
『……まだなのでございます。あの、貧乏なものでございますから。』
清子は眞赧になりました。
『ほう、まだ？』
『何から何まで差押へられてしまつて、差入れの毛布一枚御座いませんので、やつとお給金の前借をさせて頂いたやうな、本當に家が困るものですから……』
『伯父さん、どうかして無實の罪が晴れるやうに、上手に辯護してあげて頂戴な、ね、後生だから。』
愛子は訴へるやうに熱心に乞ひました。
『本當にね、そんなふだんから潔白な方でしたら、屹度何かの間違ひに極つてますわ、あなた一肌ぬいでおあげなさいよ』
『さう、私もこれには何か事情があるらしいと思つてゐた矢先だし、聞いて見れば清子さん御一家の御苦勞も大變だ、清子さん、御安心なさい、あなたのお父樣の御人格が御立派でおあんなさる以上、大丈夫無罪にしてお見せ申します。』
『まあ、有り難う御座います。』
清子は只々泣いて謝しました。
『行く水と人の流れつて、よく云つたものですわね、清子さんがそんな石川さんのお嬢樣でいらつしやるなんて、些少も知らないものですから、本當に失禮ばかりしましてね。』
『いゝえ。』
『これからは子供達と一緒に遊んで頂くやうにでもしませう、ねえ貴郎。』

『あゝそれがよからう。』
『だつて、餘りで御座いますわ。』
『ナーニ、ねえお前達、好い姉様が出來て嬉しいだらう。』
『嬉しいわお父様、私清子姉様つて云ふわよ、ねえ番町のお姉様。』
『さうよ、多喜ちやんも姉様も登子ちやんも好いお子ね、私の清子姉様はいぢめちやいやよ。』
にこやかに子達を見返つた愛子は、清子を相見て微笑みました。

〔完結〕